



自然の解説者

新年号 [第 50 号] 2016 年 1 月 12 日

NPO 法人

ぐんま緑のインタープリター協会紙
事務局：〒375-0011 藤岡市岡之郷 1179-3

櫻井昭寛 方

電話・Fax 0274-42-2726

http://inpuri.web.fc2.com/

編集：総務企画部会

赤城山覚満淵のササ刈り作戦の経緯

赤城山の自然保護活動推進協議会会長 小暮 市郎

赤城山を知るために、覚満淵は重要です。地史的には造山過程で山頂部陥没によって生じたカルデラ湖（古大沼湖）の東端部に位置し、水位低下により現在の大沼から切り離された水域です。植生上は、高層湿原の特徴を持つ部分があるので、小尾瀬と呼ばれ貴重な地域です。歴史上は明治時代から昭和 20 年の敗戦まで、山頂部は夏季の牛馬放牧場として、広く利用されていました。牛馬が食べないレンゲツツジが残っていることが証拠です。今も牧場となっている新坂平のレンゲツツジが観光資源になっていますが、覚満淵のレンゲツツジは、昔は牧場だった証拠として、歴史を知るためにも大切にしたい群落なのです。今から 10 年前（平成 18 年）、大洞在住の方々が大切な覚満淵のニッコウキスゲがニホンジカの食害により絶滅しそうだと群馬県自然環境課に訴えました。調査した結果、シカのせいだけでなく、ニッコウザサが繁茂し、原を覆いつくし、地表に光が届かなくなって、ササ以外の植物が生育しにくくなっているのがわかりました。証明するため 4 か所に 10m×10m を 1 単位とし、また、シカの侵入防止のため高さ 2m の網で囲った実験区を設けました。この実験区内を、同年の秋に草を刈り、翌年から年 2 回の草刈りをしたところ、沢山の種類の植物が見られるようになり、ニッコウキスゲも花を咲かせました。地表まで太陽が届いた効果です。キャッチフレーズにはニッコウキスゲ復活を挙げていますが、これをきっかけに、レンゲツツジを含む多様な植物の生活場所を確保すべく、多数の人の協力を得て、覚満淵の保護活動に取り組んでいます。植物の多様性を復活させるにはどのように作業すべきか、まだ不明なことが多く、刈る時期、範囲、方法などを研究しながら、徐々に進めています。基礎資料を得るために刈り払いをした場所としない場所の植物相を調べ、土壌水分量も測定しています。いふならば、環境調査をしながら、植物と相談して進めようというわけです。観察していると、植物はお互い譲り合うことなどせず、自身の生活を確保すべく、絶えず厳しい「せめぎあい」をしているように思います。現在はススキ、ワラビ等が優位に立っていますが、今後どうなるか、注意深く見守っていきたいです。平成 21 年には侵入するシカ対策のため、覚満淵の外周 1500m に防護ネットを張り、点検と修理を繰り返して成果を上げています。平成 23 年から、赤城自然塾を中心に「ササ刈り」を、多くの団体の協力を得て、実験区外の草刈りを年 2 回（5 月と 11 月）実施し始めました。平成 26 年からは年 1 回（11 月）にし、さらに平成 27 年には刈払機による作業（11 月 7 日）と刈り取ったススキやササ等を運び出す作業（11 月 8 日）に分けて、事故のリスクを少なくする配慮をしました。覚満淵の生物多様性を守るため何をすべきか、ご意見等、赤城自然塾にお寄せください。



有毒成分を作って身を守る植物

顧問 亀井 健一

自然観察を通して分かることですが、どこの山野にも有毒の植物が生えています。子供たちの自然体験活動をガイドするとき、五感を使うと理解が深まりますが、有毒植物には十分注意すべきです。ところで、有毒成分は、その植物の生存に不可欠の物質ではないが、動物や有害菌から身を守っています。人にとっては薬用になる場合もあります。有毒植物に関する知識を持ち、危険を回避する知恵と慎重さを持ちたいものです。ことさら恐れるのではなく、適切に対処すればよいのです。なお、有毒植物と言っても、口にしなければ問題は起こりません。例を上げておきます。

○トリカブトの仲間（キンポウゲ科）、ドクゼリ（セリ科）及びドクウツギ（ドクウツギ科）

：この 3 種は三大有毒植物と言われる。ヤマトリカブトの新芽は山菜のニリンソウに似る。

○スズラン（ユリ科）：強心作用がある。活けた花瓶の水で中毒した例あり。全草に有毒物質がある。

○バイケイソウとコバイケイソウ（ユリ科）：全草が有毒で誤食すると下痢を起こす。毎年のように誤食による中毒例が報道される。新芽が山菜のオオバギボウシに似る。

○ホウチャクソウ（ユリ科）：山菜のアマドコロやナルコユリに似る。嘔吐や下痢。○マムシグサ（サトイモ科）：全草が有毒。子供が赤い果実を食べ中毒を起こした例がある。下痢、嘔吐、口内のしびれなどを起こす。○ハシリドコロ（ナス科）：根がオニドコロに似て、誤食すると幻覚症状を起こし苦しんで走り回ることから付けられた名。新芽がフキノトウやオオバギボウシに似る。○ヒガンバナ、キツネノカミソリ及びスイセン（ヒガンバナ科）：全草に毒があるが特に球根に多い。スイセンは葉がニラやノビルに似る。○クサノオウやタケニグサ（ケシ科）：幻覚症状、呼吸麻痺など。汁は皮膚炎を起こす。○ヨウシュヤマゴボウ（ヤマゴボウ科）：北アメリカ原産の帰化植物。全草有毒。○アセビ、シャクナゲ、レンゲツツジ、ネジキ、ハナヒリノキ（ツツジ科）：家畜が葉や花などを食べると酔ったようにふらつく。腹痛、下痢、嘔吐、呼吸困難などが起こる。○キョウチクトウ（キョウチクトウ科）：インド原産。花がきれいで育てやすく、大気汚染に強く、植木に使われる。強い強心作用がある。



マムシグサ

<活動報告>**赤城山秋の自然観察会** 会員資質向上研修6 10月3日(土) 赤城山 (総務企画部会)

21名の協会員が参加し、終始お天気に恵まれた観察会となりました。赤城公園ビジターセンターに集合し、覚満淵をまわり、鳥居峠、長七郎山、小沼、血の池で観察を行いました。講師の亀井先生に、自然の仕組みやシカの生態や食害、赤城山の歴史等をご指導いただきました。長七郎山の山頂で富士見町民になって初めて、富士見町から富士山を見ることができました。遠くまで見渡せる澄んだ空気から、秋の訪れを感じられました。(弓削田)

藤岡市市民活動フェスティバル 10月11日(日) 藤岡市総合学習センター (受託協力部会)

朝のうちは雨で心配しましたが、時間と共に天候も良くなりました。シノ笛、竹トンボ、ウディピンチデコレーション、ネームプレート、バードコール、木の人形ストラップの6品目を作りました。子供たちの真剣な顔、嬉しそうな顔、皆、それぞれのクラフト制作でした。協会員10名が参加し、緑の募金は4,358円でした。(竹内)

森の中でゲームをしよう！思い出のしおりも作ろう！ 10月17日(土) 前橋市委託事業3
おおさる山乃家 (受託協力部会)

午前の講師は茂木清美さんと櫻井さんで、雨のため室内でのネイチャーゲーム。「落ち葉のカルタ」や「ノーズ」「コウモリと蛾」では内気だった子供たちも大はしゃぎでした。午後は雨も上がり「思い出のしおり」作り。素材の葉っぱ集めは自然観察会になりました。大人も子供も集中しての作業の結果、色とりどりの紅葉ラミネートが仕上がりました。(浅沼)

シカ食害対策アミ巻き 会員資質向上研修7 10月25日(日) 赤城山 (総務企画部会)

林業試験場の坂庭さんと協会員の春山さん指導の下、協会員13名が赤城山厚生団地のウラジロモミにシカ食害対策の網巻きを行いました。例年行っている手慣れた作業で1時間足らずで用意した厚手の網を巻き終えました。その後、強風で雪も舞う悪天候の中で協会員9名が、シカの食害が目立つ出張山から薬師岳の尾根伝いに薄手の網を巻きました。(櫻井)

インプリの森整備 10月10日(土)、24日(土) (インプリの森部会)

10月10日(土)の参加者は9名。インプリの森から南の沼に行く歩道の整備を終日行いました。歩道に生えたササ刈りと台風によって倒れた木をチェーンソーで玉切りにして歩道から運び出しました。佐藤さんがスズメバチに手の甲を2カ所刺されてしまい、病院に行き手当を受けました。今後は更に注意をして進めたいです。

10月24日(土)の参加者は5名。好天に恵まれて前回と同様の整備をしました。倒れた大木を集中してチェーンソーで切り、片付けました。(吉本)

木の実を集めてリースを作ろう！ 森の体験4 11月1日(日) 赤城木の家 (受託協力部会)

一般17名、協会員7名参加して神澤さんの指導でリースを作りました。集合時はかなり寒かったのですが、木の枝やドングリを集めているうちに小春日和になりました。木の家に来ていた2家族も午後から参加して24名がリースを作りました。最後に家族ごとに前に出て、自分の作品を自慢げに発表し、今年の「森の体験ふれあい事業」は全て終了しました。(吉田幸)

覚満淵ササ刈り作戦 11月7日(土)、8日(日) 赤城山覚満淵 (インプリの森部会)

平成27年度秋の覚満淵のササ刈りを自然保護活動推進協議会の主催で行いました。今回は安全を考慮して、ササ刈りの日と搬出の日を分けて実施しました。

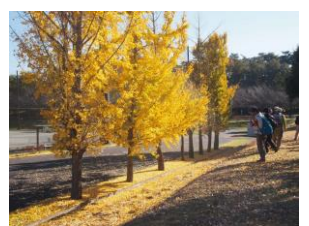
11月7日(土)は協会員9名、総勢41名が参加して、刈払機を使ってササ刈りを行い、11月8日(日)は協会員4名、総勢149名が参加して、刈ったササやスキの搬出をしました。8日はあいにくの雨で朝の気温は8度と寒かったのですが、参加者の皆が頑張って、前日に刈った長いスキを紐で束ね、短いササは袋に入れて運び出しました。5班の作業量は多く、後半は他の班の応援を得て終了することが出来ました。(吉本)

多々良沼自然観察会 会員資質向上研修8 11月28日(土) 多々良沼 (総務企画部会)

館林美術館から彫刻の道を通り、多々良沼一周6.7kmのコースで、協会員20名参加し、大谷正明さんのガイドで行いました。午前には樹木の観察、午後は野鳥観察に軸足が移りました。私が興味を引いたのは「シナヒイラギ」です。若いシナヒイラギは葉の先端に鋭い棘があり古木になるにつれ葉は棘がなく丸味になります。人は年を増すと頑固になるがシナヒイラギを見習わなければ・・・。多々良沼ではオオバンの集団が同じ方向を向いて行動している姿が面白く愛おしく感じました。白鳥は5羽確認できました。秋晴れに恵まれ、木も鳥も会員も輝いて見えました。良い解説に気分も爽快、充実した楽しい一日でした。(本間)

竹炭焼き研修 会員資質向上研修(追加) 12月5日(土) インプリ広場(仮称) (総務企画部会)

10/1、11/13に炭焼き釜を設置し、この日、足利工業大学付属高校の岩崎眞理先生の指導で竹炭焼きの初火入れを行いました。野焼きでマツボックリやトチの実などの花炭の作り方も教わり、炭が焼けるまでの時間でピザを焼き、皆で美味しくいただきました。(櫻井)



<協会活動のトピック>

炭焼き研修

平成27年2月14日の上毛新聞にドラム缶式炭焼き窯を寄贈する記事が載りました。協会で炭焼きのイベントができれば楽しいのではないかと考えましたが、一人では無理なので協会員に協力を求めたところ13名の方が手を挙げてくれました。

そこで寄贈を申し込み、4月に足利工業大学付属高校よりドラム缶式炭焼き窯を頂きました。協会員の協力で10月1日と11月13日に炭焼き窯を富士見町のインプリ広場(仮)に設置し、12月5日に協会員18名と近所の方など6名が集まり、寄贈元の岩崎眞理先生の指導で竹炭焼きの初火入れ式を行いました。竹炭は3時間半程度で焼き上がり、初めてにしては上出来の竹炭でした。今後、年2回程度の炭焼きを行って行きたいと思います。協会員の協力をお願いします。(櫻井)

緑の窓

心おど躍る花

第8期生 大谷 正明



サクラは「心躍る花」である。駿河桜に魅せられてから、千鳥ヶ淵に舞う花びらの花筏(はないかだ)の光景や皇居東御苑の天城吉野、上野の小松乙女、香りの大島桜、冬の熱海桜、鬼石の寒桜、桜とは思えない寒緋桜も可憐であり、枚挙に遑(いとま)がない。桜は同じ形をした花卉5枚の一重咲が一般的だが、花の色も白色から淡紅色、紅色、紅紫色、緑色、黄緑色、八重咲と多彩であり、種類も多く500種にも及んでいる。暖温帯で生活する我々に最も馴染み深いのは、「染井吉野」であろう。多花性、豪華で、反面もののあわれすら醸し出す。春を実感しうる花であり、日本の「サクラ」を象徴するものになっている。桜は「日本人の文化の花」でもある。花卉が大きく紅紫色鮮やかで、染井吉野より先に咲く河津桜も、近年、土手や公園に植栽され、春を先取りしているかのような感もある。また、山地から亜高山帯にかけて生育する深山桜(みやまざくら)は、5~6月に楽しむことができる。葉の開出後に円形白色の花を固まって房のように枝先に咲かせる野生種の桜で、葉より上側に長さ4~8cmの総状花序を出し、花卉は5枚で先端にへこみがない。花の咲く時期や、実の付いている時期であれば簡単に探すことができる。葉だけでも見わけることは可能である。①葉表面には、まばらに毛があり、光沢無く、裏面脈上や葉柄に淡褐色の伏毛がある。②先端が尾状に鋭く尖り、基部は広い楔形か切形になっていて、蜜腺も葉身基部にある。③葉縁は欠刻状重鋸歯で独特な形をしており、鋸歯の先端に腺がある。このように深山桜は他の桜とは大きく異なっており、高嶺桜(たかねざくら)との判別もできる。今年の山歩きの折に、親しみを持って見るのは如何でしょうか。



深山桜(みやまざくら)



葉より上に総状に実をつける



カエルの歌をたどってみると

群馬県自然環境調査研究会会員 金井 賢一郎

カエルは古来、人里近くで親しまれてきた生物なので、古歌や童謡などにもよく出てくる。例えば、斉藤茂吉(歌人)の「死に近き母に添い寝のしんしんと遠田の蛙 天に聞こゆる」。こんなに声を響かせるのは、アマガエルであろう。また、俳人松尾芭蕉の詠む「古池や蛙とびこむ水の音」、池というから止水性のカエルであろうが、古寺などで蛙合戦の伝えと並んで称されることから、トノサマガエルかアマガエルか、またはツチガエルではないかと、いくつか説があるようで、皆さんが真剣に考え込む。童謡をみてみよう。「月夜の田んぼで コロコロコロなる笛は あれは蛙の銀の笛」と歌われるのは、その声と場所からシュレーゲルアオガエルだし、「カエルの歌がきこえてくるよ ガッガッガッガッゲロゲロゲロゲロ・・・」とくれば「ああ、アマガエルだ」。

一方、声だけでなく生態についても「オタマジャクシに足が出て、手が出てきたら尾がとれた」とか、「オタマジャクシはカエルの子 ナマズの孫ではないわいな それが何より証拠には やがて手が出る足が出る」と変態を歌っている。順番としては前者が正しいが、いずれにせよ前・後肢が出てというわけだ。また、鳴囊(めいのう)をもたないので声をもてないヒキガエル(ガマガエル)については、代わりに人間が「ガマの油売り」の口上をのべて紹介している。いかにも人間の身近な存在であったかがうかがえる。カエルと人がいつまでも身近に暮らせる環境がつづくことを願っている。



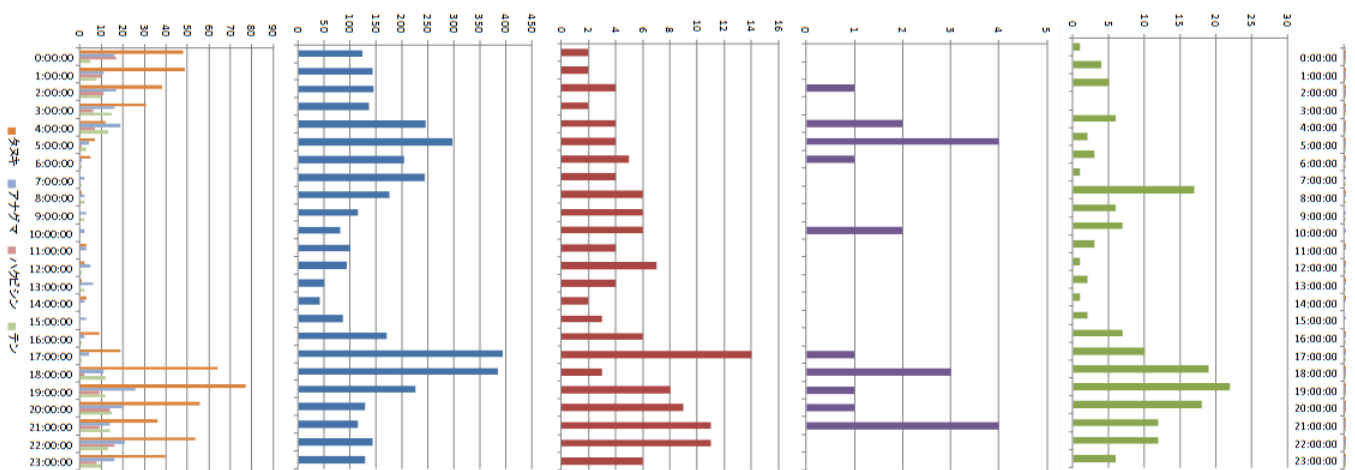
<哺乳類の話> 第4回

動物の行動時間

群馬県立自然史博物館学芸員 姉崎 智子

夜の森の中。耳をすませてみてください。なにか、かさこそ音がしませんか？多くの野生動物が、夜に最も活発に活動する夜行性動物です。しかし、動物種によって行動時間のピークは若干異なります。当館が上野村で行っている赤外線センサーカメラを用いたカメラトラップ調査のデータによると、タヌキ、アナグマ、ハクビシン、テンなどの小型の食肉目は、昼間はほとんど撮影されず、図1にあるように夕方から明け方にかけて撮影される傾向が認められました。一方で、シカ、カモシカなどの草食動物は、夕方から早朝に活動がみられるものの、食肉目にくらべて、どちらかという薄明薄暮型の行動をとっていることが伺えます(図2、図3)。彼らは、餌となる植物を反芻胃に詰め込み、安全なところでゆっくりと噛み戻しながら、消化します。クマは、早朝や夕方など薄暗い時間帯に多く撮影されています(図4)。しかし、闇夜に乗じて行動するのは人里が近いところでの姿であって、人がいない環境であれば明るい時間帯でも活動していることが最近の研究でわかってきました。同様の傾向がイノシシでも認められ(図5) もともと昼行性の彼らも、人里に近い場所では暗くなってから行動していることが確認されています。

撮影回数(回)



(図1) 食肉目

(図2) シカ

(図3) カモシカ

(図4) クマ

(図5) イノシシ

動物の行動時間帯

<協会の声>

日本百名山達成のその後は・・・

第13期生 見城 美枝

自然豊かな沼田市に生まれましたが、住宅街で育った私は、土とたわむれ、自然と遊んだ記憶もなく大人になりました。小学生の頃、家の窓からセミがビルの壁にとまって鳴いているのを見つめていたことを今でも覚えています。尾瀬の玄関口沼田に住みながら、初めて尾瀬を歩いたのは30代を過ぎてからのことです。結婚してから主人と時々ハイキングに行くようになり、次第に娘も一緒に親子3人で日本百名山を目標として本格的に登山をはじめ、登山を中心とした生活に明け暮れるようになりました。初めは、まだ小学2年生の小さな娘が飽きないようにと娘に山に伝わるお話や、自然の解説をしながら歩いていました。しかし、すぐに話のネタがなくなってしまいました。いつからか自分も足元や周囲に徐々に目が行くようになり、自然に興味をわいてきて【自然の解説者養成講座】を知り受講しました。娘も今では小学6年生となり、今年家族3人で日本百名山を達成することができました。もっと早くこの講座を受講していたら、娘にいろんなことを話してあげられたのにと……。これからも少しずつ自然のことを学んでいけたらと思っています。ご指導よろしくお願ひします。



<協会が実施する事業・研修会等>

実施日	内容	会場
平成28年2月20日(土)	会員資質向上研修9 講演会「謎の蝶アサギマダラの渡りの秘密」	前橋市総合福祉会館
平成28年2月20日(土)	Mサポふれあい祭り	前橋プラザ元気21

<訂正> 秋季号【第49号】3ページ 緑の窓 ホウジロ(誤)をホオジロ(正)に訂正します。

<編集後記> ペルー沿岸の太平洋赤道付近の海域で海面水温が平年より高くなるエルニーニョ現象が発生しています。世界各地で異常気象を引き起こす原因になっています。日本では今年の冬は暖冬になると予想されています。私達も周りの自然を注意深く監視していきましょう。(今泉)